日本の戦闘者

荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大卒、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『サムライ精神を復活せよ』並木書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
https://musubinosato.jp/

俺は、陸上自衛隊に特殊部隊を創設するために留学したが、その中の一つに特殊作戦群の装備の選考もあった。米陸軍特殊作戦コマンド・JFK Special Warfare Center & School（ジョン F.ケネディ特殊戦センター＆スクール：JFKSWCS）には、世界中の小火器（拳銃から自動小銃、機関銃等）のほぼ全てが揃っているが、銃器メーカの試作品やオーダーメイドの武器は、やはりメーカに直接出向いて試射することになる。米国ではそれができる。カタログだけを見比べて、いくらスペックがよくても、欧米人に比べ掌のサイズが小さい日本人にはむかない拳銃や、腕の長さが短い日本人にはストックが長すぎるライフル等がある。何よりも、自分たちが遂行するオペレーションに適しているかどうかということが一番大事である。

ということで、俺はできるだけ多くの銃器を実際に射撃し、取り扱ってみて、特殊作戦群に最も適した装備を選択した。また、潜入行動で使うパラシュートや潜水具等も実際に使ってみて何が必要なのかを確認した。弾薬や爆破資機材、光学資機材も多様で、戦術行動や作戦環境で使い分けなければならない。米国と日本の法的に、あるいは輸出入規制上問題のない個人用装具、ギアやバックパック等は自費で買えるだけ購入した。おかげで、留学から戻った時は、我が家の貯金がスッカラカンになっていた。

こんな具合に、俺は、特殊作戦群の創設と特殊作戦の運用に関するノウハウと能力をたらふく習得して帰国した。

俺にとって、特殊作戦群長要員に指定されてからの約2年間は、特殊作戦群長としての覚悟を固める時間だった。10年がかりでようやくできた特殊作戦群の新編にあたり、ポンコツの指揮官が特殊作戦群の指揮を執ることだけは許されなかった。

俺には、特殊作戦群の指揮を執るために決めたことが三つあった。一つ目は、俺が一番日本を愛していること。二つ目は、俺が一番特殊作戦を理解していること。三つ目は、俺が一番の特殊作戦戦士であること。この三つが特殊作戦群の指揮官としての絶対条件だった。一つ目は、俺は絶対の自信を持っている。俺は日本を日本足らしめるために生まれてきた日本の戦闘者だ。二つ目と三つ目は、俺が新たに身につけなくてはならない課題だった。それを、グリーンベレーに留学し、また、SASやKSK等世界の特殊部隊と交わりながら自らの資質を磨いていった。俺の場合、特殊作戦の理解や実力を身につけることに、武道で身につけた戦いの理合いや感性がとても役に立った。個人の戦いでも国家の戦いでも、戦いに共通する原理原則は同じだからだ。

この三つの決心以外にもう一つ、特殊作戦群群長になるときに決めたことがある。それは、特殊作戦群の指揮官を最後に自衛隊を辞めることだ。戦後日本では、日本国憲法と政治的枠組みの中で、日本の防衛は虚構と詭弁の中でもてあそばれてきた。防衛そのものを否定する左翼勢力と、米国に依存する形ばかりの防衛で良しとする保守勢力の中で、真に国を愛し、国のために戦い、国のための死することを願う日本の戦闘者は、自衛隊の中でさえその志を実践する居場所がなかった。このような真の日本の戦闘者の多くは、自衛隊の中で自分の本心を語らなくなるか自衛隊を辞めるしかなくなる。俺は、真に日本を愛する戦闘者が、全身全霊で国防のために力を尽くせる部隊をつくらなければいけないと思った。それが特殊作戦群だ。もし俺が、その後の自分の自衛隊の中での立身出世や退職後の安定した生活のために妥協したのでは、特殊作戦部隊を創ることなど到底できないからだ。

2003年10月、俺が帰国したときには、既に習志野駐屯地の第1空挺団内に特殊作戦群編成準備隊ができていた。後に、特殊作戦群副群長として特殊作戦群の創設の大きな力になってくれた宮本準備隊長から、準備隊の職を申し受け、翌2004年3月に特殊作戦群を立ち上げるための準備に取り掛かった。

空挺団は、俺にとっては古巣だったが、陸上自衛隊の中で「精鋭無比」の看板を掲げる空挺団にとって、さらにその上の生成部隊である特殊作戦群の存在は気に入らなかった。フォートブラッグで三島瑞穂さんから聞いていた、第82空挺師団のグリーンベレー隊員に対する嫌がらせと同じことが生じた。まず最初は、空挺団に所属しながら空挺手当てがもらえなくなった。元々空挺団あがりの隊員にとっては経済的に大きな打撃であった。空挺団長の決定を覆すことができなかった俺は隊員家族のみんなに謝罪した。次には、自衛隊官舎に入れないという事態が生じた。空挺団割り当ての官舎は、空挺隊員優先で特戦群要員には配分しないということだった。しかも、一般住宅に入ると特戦群隊員は身分秘匿上の問題があり近所付き合いが限りなく限定される。そういうわけで、全国から選抜されて特戦群要員として転属してきた隊員の住居探しは混迷を極めた。保全上のストレスから奥さんが精神を病んだ隊員もいた。そんな中でも、特殊作戦群要員の強者達は、文句一つ言うことなく部隊創設に向け黙々と働いた。部隊創設準備と並行して、俺が持ち帰った特殊作戦用の戦術・戦闘・戦技の訓練が始まった。これまで自衛隊では訓練したことの無い内容ばかりの高度なスキルを養成するものである。素晴しい集中力と吸収力で、日に日にスキルは向上した。本当に素晴らしい隊員達である。

俺は、彼らの準備や訓練を指導する一方で、陸上幕僚監部との交渉を開始した。すでに決まっている編成・装備の変更や、訓練施設の建設、特殊作戦群オペレーターの選抜要領、特殊作戦群独自の訓練基準の設定等やらなければいけないことは目白押しであった。それらを、未だにレンジャーと特殊部隊の区別もつかない自衛隊高官に説明し、納得させるのには骨が折れた。

そうこうしているうちに、習志野駐屯地に特殊作戦群の隊舎が完成し、ようやくそこへ引っ越すことができた。計画では、特殊作戦群用に建てられたはずの物品倉庫や落下傘整備場は空挺団にもっていかれたので、隊員の居住スペースを潰して倉庫にする等いろいろ苦労はあったが、特殊作戦群の城ができたことは、隊員たちのモチベーションをより一層向上させた。相変わらず、特殊作戦群隊員の出入門を規制するなど空挺団からのいちゃもんはあったが、そんなことにかまっている暇はなかった。何しろ特殊作戦群は世界最強を目指しているのだから、一分一秒も無駄にできない。世界最強になるためには、米国や他の国の特殊部隊のものまね訓練をしていたのでは不可能である。

そのために絶対必要なのが、心の問題である。精神基盤を確立して、自らが求める最強の目標に向かい全身全霊を使い切れる隊員を育成しなくてはならない。俺は、その精神基盤を武士道に求めた。歴史上卓越した日本の戦闘者の精神基盤の上に、高度の戦術・戦闘。戦技能力を構築し、世界最強の特殊作戦群を作ることにした。それが、特殊作戦群の武士道だ。

特殊作戦群戦士の武士道

一　確たる精神的規範（正義）を有し生死の別を問わず事に当る腹決めをすること
一　臆せず行動できる勇気（気概）とこれを維持する気力（胆力）を鍛錬すること
一　事を成し遂げる実力（知力、技術、体力）を修養すること
一　言動を一致させ信義を貫くこと

「確たる精神的規範（正義）を有し生死の別を問わず事に当る腹決めをすること」。正義とは人から与えられるものではない。自分で確立するものである。自分の生死を問わず正しいと信じて行動できる精神規範がなくては、合理性に流され、従属的になり、自爆テロをも辞さない相手や自分より強い相手と戦うことなどできない。自衛官特有の「命令があればやります」とか「やるときはやります」みたいないい加減な態度ではなく、平素から自分の正義に基づいて何を為すのかを決めておかなくては、いざという時に何もできない。

「臆せず行動できる勇気（気概）とこれを維持する気力（胆力）を鍛錬すること」。瞬発性の勇気では、特殊作戦はできない。如何なる悪条件下にあっても粛々と使命を遂行する気概が、死んでも持続するものでなくてはならない。それが胆力というものだ。自分の生き様死に様について腹決めをした時の肚（はら）がそのままに力として発揚されるように、常に自分に言い聞かせるのだ。

「事を成し遂げる実力（知力、技術、体力）を修養すること」。自己の正義を具現するためには、知力、技術、体力が必要とされる。如何なる知識、技術、体力が必要かは、時を惜しまず、常に具体的状況を思い描いて貪欲に身につけることが必要だ。また、その気持ちが強く持続していれば、見聞きし体験するすべての事が自己の実力に反映し転化できるものである。

「言動を一致させ信義を貫くこと」。国を守るとは集団で歴史的持続性をもって為し続けなくては成し得ないものである。また、部隊は一つの生命体のようなもので、心を一つに一人一人が力を出し切ってこそ最強の部隊足り得る。我々の使命は、このように歴史的連続性の中にある集団の団結を守ることである。したがって、信義を貫くことこそが集団の団結を強固にし歴史的連続性を保守することになる。

この特戦群戦士の武士道が、日々の一挙手一動にまで具体的に反映されるようになるまで、隊員一人一人を徹底的に鍛えてこそ、世界最強の日本の戦闘集団が再現できるのだ。

習志野駐屯地に特殊作戦群の隊舎が完成した（写真は当時）。

特殊作戦群は身分秘匿で、一般的に公開されることは限定されている。

42-43.indd 42-43 2021/02/17 12:35